

# 世帯類型からみた居住形態の現状と居住の継承に関する調査研究

## —奈良市奈良町北地区の場合—

○山本稲子\* 今井範子\*\* (\*奈良女大・院, \*\*奈良女大)

【目的】奈良町北地区は、中世に成立し近世にかけて発展した町であるが、現在は伝統的な住宅と現代的な住宅、マンション、アパートなどが混在した町となっており、今後より一層、住宅・住環境の変化や居住者の変動が起こることが予測される。周辺には東大寺や奈良公園などの歴史的環境が充実し、交通の便もよく生活環境にも恵まれた奈良町北地区が、今後も歴史ある居住地として存続していくことが将来の町の発展に結びつくと思われる。そこで世帯類型からみた居住形態の現状と居住の継承を探り、よりよい住環境形成への基礎的資料となることを目的とする。

【方法】奈良市奈良町北地区のうち押上・今小路・手貝・東包永・東笹鉾・半田に居住する世帯を対象に2000年10月に留置式質問紙調査を行った。有効回収数238票である。

【結果】①世帯類型をみると、夫婦+子、夫婦のみがそれぞれ2.5割、親+夫婦+子が2割、単身が1.5割であり、三世代同居が減少している。家屋や土地を親から継承した世帯（継承型）の3割には三世代同居がみられ、若い世代への世代交代が成立している。一方、自分の代で創設した世帯（創設型）は、夫婦のみ世帯、単身世帯が多く、高齢単身化が進んでいる。なお、夫婦のみ世帯と単身世帯のそれぞれ2割は、子と近居していることがわかった。②次世代への家屋や土地の継承については、継承の見とおしがある世帯は約半数である。現在、継承型が7割、創設型が3割であるが、次世代は継承型が減少することから、高齢単身化がさらに進行することが推測される。③現住宅を老後の住まいと考える者は多く、次世代に継承される可能性が低い世帯では住宅改善が積極的に行われにくい状況であるが、次世代への継承の有無にかかわらず、手すりをつける、段差をなくすなどのバリアフリーへの改善要求は高いことが明らかになった。